

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

20世紀の陰に光をあてる文学者：
モンゴル国の人民作家デンデビーン・プレブドルジ
は語る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001897

20世紀の陰に光をあてる文学者 モンゴル国の人民作家デンデビーン・プレブドルジは語る

解説

- 1 生まれ故郷
- 2 ウランバートルでの勤務
- 3 中国訪問
- 4 モスクワ留学
- 5 『20世紀の経典』づくり
- 6 チンギス・ハーン賞賛の罪
- 7 1950年代のウランバートル

- 8 ウランバートルの変貌
- 9 世界の多様性
- 10 社会主義時代の苦悩
- 11 最新作『赤い家の囚われ人』
- 12 日本人との関係
- 13 慈悲の心
- 14 エルデネ氏の思い出

解説

社会主義を背負い、国づくりにいそしんできた人びとにとって、過去はあくまでも美しいものであろう。しかし、その過去には、背後にいつも危険がひそんでいた。社会の幸福という名目のもとに、個人を不幸におとしめる、そんな大なる誤りをおかす危険性は、つねにここかしこに潜在しており、そして実際に、いくつもの過ちがくりかえされた。

そうした社会主義時代の陰について、私たちが耳をかたむけるべき話をしてくださる人は決して少なくはない。私たちはプレブドルジ氏にインタビューをお願いすることにした。おりしも、彼の最新作『赤い家の囚われ人』がデパート内の書店などで散見されていたからである。そのタイトルはまさに、彼が、社会主義国だったモンゴルの過去の闇に光をあてるという作業を通じて、現在を生きている作家であることを如実に示していた。

作家というものはそもそも、みずからを表現する手段をすでに持っている。したがって、その作品のなかに、すでに十全に、事実としての過去は描かれているにちがいない。それでもなお、私はぜひ直接会ってみたいと願った。私が会ってみたいのは、単なる過去の記憶ではない。決してしあわせばかりではなかった過去を現在の糧にする、そんな生き方と出会っておきたいと思ったのである。

プレブドルジ氏は、1923年に現在の、ウブスハンガイ県ブルド郡に生まれた。ここは、13世紀のモンゴル帝国の首都カラコルムに近く、ツーリストキャンプの比較的集中しているところである。現在では、砂漠化が著しく、毎年のように早魃にさいなまれているが、かつては植生も豊かで政治の中心となりうる地域であった。

この地に生まれて、プレブドルジ氏は、義務教育を最後まで終えて卒業した。当時、

卒業しおえた生徒は少なく、それゆえに、彼は地元で教師となる。やがて県の中心地でいわば教育委員会の仕事をするようになり、そして、20歳のとき、すなわち1953年から、首都ウランバートルで文学や芸術にかかわる仕事をするようになった。

彼が敬愛してやまないリンチン氏との思い出や、最後まで一緒だった盟友のエルデネ氏との思い出などが、ごくわずかなインタビューの時間内に詰め込まれている。民主化以前の1981年に、長編詩「黒い雪」「青い木綿の夏服」などにより国家賞を受賞しており、社会主義との折り合いもつけてきたようである。一方的に迫害だけされてきたわけではない作家の目から、社会主義時代の欠陥が語られている。

インタビューは、2001年8月ホテルの一角でおこなわれた。撮影の都合で、急遽、連絡したせいもあってか、何度も手短かに切り上げようと言われた。しかしそれは、文字にして語ることを職業とする者にありがちな、声で語ることに對する、一種のはにかみであったろうと思われる。

P：D.プレブドルジ

K：小長谷有紀

L：I.ルハグワスレン

1 生まれ故郷

K：このたびのインタビューをあなたの幼少期の思い出から始めたいと思います。あなたはどこで何年にお生まれになりましたか？学校教育を受けていたころについてお話しいただけますか？

P：私が生まれたころ、20世紀はまだ始まりの頃でした。やっと33歳でしたから（2033年の意）。私の生まれたところは、今の行政区でいうと、ウブスハンガイ県のブルド郡です。この地方を研究者たちは「民族の中心地」とであると証明しています。私の生まれたソムの中心地から17キロメートル離れたところに、モンゴルの国土の中心地が定められ、標識が置かれています。

K：人で言えば、へそのような場所ですね。

P：まさにへそです。私はモンゴル国のへそで生まれました。モンゴル人の理解にもとづくならば、民族の「火の元で生まれた」と言ってよいでしょう。「(先祖代々受け継いだ) 炉の子ども」とも言います。故郷では、私はごく普通の1人の人間です。私の生まれた地域のひとつの特色は、モンゴル仏教の最初の活仏ウンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルが1640年に座主になった場所だということです。「モンゴル」という名前をもつ山がありますが、その山の頂に「シレート・ツァガン・ノール」という土地があります。そこに、ウンドゥル・ゲゲーンを座主として据えたのです。彼はウラン

パートル市の土台をそこに初めて据えました。私は、思うに、地方に生まれましたが、同時に国家の首都の原住民でもあると思うのです。

私の父は牧民でした。軍隊に行き、准医師として働きました。そして幾つかの村で医者をしました。ある面から考えると、私は牧民の息子で、もう一方から見ると、知識人というか、そんな子どもです。私は6歳からモンゴル文語を家族の者に教えてもらいました。

K：あなたのお父様が教えてくださったということですか？

P：モンゴル文字を教える先生がいたのです。当時、「成人学校」というのがありました。成人した人びとに文字を教える臨時の学校です。私は母についてその学校に通い、1年生に入るところには、モンゴル文字を読めるようになっており、また少々のことであれば書けるようになっていました。それで、1年生に入るところには、私にはそう大きな障害はありませんでした。それ以後の生活といえば、私が7歳のころに、父が私たちを捨てたということです。母と弟と3人が取り残されました。私の弟は4歳でしたよ。今も生きていますがね。私と同様、老いました。生涯、卓球のコーチでした。サンジヤガウと言います。私たち2人を母はしばらく育ててくれて、その後、継父ができたのです。

K：それは何年のことですか？

P：1940年のことです。それから私は中学校を卒業しました。当時、地方で7年生を卒業する人間はほとんどいませんでした。ちょうどその春、学校の女教師が妊娠しましてね。それで、学校には他に先生がいませんでした。そして、この地で誰か学のある人ということで、私に白羽の矢が立てられたようで、小学校の教師になったのです。私が中学校を卒業したころ、子どもたちは学校に行きたがらなかったものです。ウブルハンガイ県ホジルト郡というところを聞いたことがあるでしょう、そこに7年制学校が建てられたときには86人の生徒が入学しました。それが卒業時には14人しか残りませんでした。ほかはみな逃げてしまったのです。あなたがたは学者のチョイ・ロブサンジャブ博士をご存じでしょうが、残った14人の中にロブサンジャブ博士と私が出たのです。私たち2人は同じ学校の卒業生であることを生涯忘れません。

私は小学校の教師として2年勤めました。ずいぶん良い教師であったようで、誰がどのように評価したかわからないのですが、県庁からお呼びがかかったのです。そして県の教育局監査官になりました。こうして19歳でウブルハンガイ県教育局監査官になったのです。そこでは識字教育と資格認定の仕事に携わりました。「識字者であることを認める」という証明書を出していたのです。そこで働いたあと、ウランパートルへ上京してきました。

2 ウランバートルでの勤務

私は偉い幹部になれるように思っていました。そのころ党大学というのがあったのです。モンゴル人民革命党の大学ですよ。偉くなろうと思って1年勉強したけれどだめでした。大学の規律を守ることができなくて退学になりました。そのころ私は詩を書いていました。もともと幼いころからユール（祝詞）を詠んだり、詩を書いたりしていたのです。自分の書いた詩や文章を持って、当時の著名な作家に会いに行きました。そのころモンゴルには大きな劇場が1つだけありました。今のスフバートル広場のところにある劇場ですよ。1953年に、20歳の時でしたか、この劇場の「文芸担当」という仕事に就くようになったのです。劇場にかかる演劇や映画脚本やコンサートでの歌などを作家から受け取る仕事です。

私が勤務していたころ、劇場にはモンゴル芸術の「黄金の世代の人びと」と言われた有名な人たちが働いていました。俳優のツァガーニ・ツェグミド、ニヤムイン・ツェグミド、N.イチンホルローなどです。M.ツェヴェーンジャブさんもいました。歌手ではL.ツォグゾルマー、A.ザグドスレン、D.プレブスレンなどがここで歌っていました。芸術監督・総合演出はL.ワンガンでした。我が国でも最も有名な演出家・劇作家です。彼の次の演出家は人民芸術家受章のS.ゲンデンでした。劇場の音楽指揮者は人民芸術家受章のJ.チョローンでした。作曲家でやはり人民芸術家受章のB.ダムディンスレン、S.ゴンチグソムラーなどが名を連ねていました。美術では画家のL.ガワー、A.ナムハイツェレンなど、それぞれみな「人民芸術家」の称号を持っている方々ばかりでした。そんな偉い人たちの中で私は芸術を理解しはじめたのです。郡の芸術愛好者程度の私がいきなりそのような大劇場に入るのですからたいへんでした。その劇場は私にとって創作のアカデミーであったと思います。モンゴル人民の中から生まれたこれらの著名な方々が、私を芸術に、文学にいざなったのです。私が劇場に入ったとき、N.ノロブバンザドという歌手はまだいませんでした。そのころ彼女はドンドゴビ県庁のタイピストだったのです。のちにこの驚くべき実力の歌手が頭角をあらわしたのでした。N.ノロブバンザドは真に崇敬してやまない歌手です。本当に20世紀に唯一の人、2人は生まれません。私たちは作品を通じて関わりもあるし、友人としても親交があります。N.ノロブバンザドの夫のN.バンズラグチは作家です。彼の母は私の母とたいへん親しかったのです。2人はよくお茶を一緒に飲んでいましたし、本当に思ったことを話せる女友達だったのですね。

私は1955年に作家協会に入って、1984年までそこで働きました。1959年に1年以上のあいだ、文芸の「トンショール（銅鑼）」という笑い話の雑誌の編集長として働きました。私の先生はD.セングーというモンゴルのたいへん著名な作家で、作家協会長となって、私が学校に行くことをとても応援してくれました。

3 中国訪問

私は1957年に、モンゴルの大学者であるB.リンチン氏と一緒に中国に行きました。そのとき、中華人民共和国で見聞した事柄は、たいへんおもしろかったですね。地方の農民の家にお邪魔したときに「毛沢東主席の力で私は白米を食べることができるようになった」と泣いていたのです。

K：昔、ほんとうに極貧状態で、毛主席のころに生活が向上しているのですよね。

P：そうです。これについて、私は自分の新しい著作に書いたのです。その当時、北京の駅付近には、建物の壁に1枚の絵が貼ってありました。その絵には、机の上に載った3~4粒の白米に1本の大きな手が指し示されてあって、そこに「犯罪」と書いてありました。私たちと同行した中国の作家はその絵をこんなふうに説明していました。「中国では、1人の人間が、1粒の米を捨てれば、5億4千万粒の米が捨てられるという意味だ。その5億4千万というのは、中国の人口だ。これはかなりの米が捨て去られることを意味する」

私は今でもそれを正しいと思います。おおよそ、すべての国や民族は自分で生産している富をそのように大切に、守る必要があります。それはまさに正しい考えであり、正しい面から啓蒙していますし、理解させようとしている試みでした。しかし、モンゴル人たちは、本当にすごたくさんのものを捨て去っている国民ですよ。今でも、捨て去っている真っ最中です。モンゴル人たちは、1粒の米どころか、1頭のヒツジやヤギを丸ごと捨て去るのですから。

4 モスクワ留学

その旅の途中、B.リンチン氏は私に

「あなたは何でもかんでも、生来の能力だけで乗り切るつもりですか？ ロシアに行つて、勉強しなさい、文芸学校に行きなさい！ ロシア語を学んで、英語やフランス語を学びなさい！」とおっしゃるのです。これは私にとって生涯忘れがたい教訓となりました。B.リンチン氏と私はかなり強い結びつきがあり、私は彼のことをとても尊敬している1人ですよ。B.リンチン氏を山に喩えれば、私は彼の脇でちっぽけな丘のようなものです。しかし、その大きな山は私をどんなときも威圧することはありませんでした。私がものを尋ねると、B.リンチン氏は真心から答えてくれたものです。モンゴルの劇場に初めてシェークスピアの「オセロ」という有名な劇が演出されたとき、私は文芸に携わっている者として、モンゴルの最も有名な翻訳者であるCh.チミドという人に訳してもらい、B.リンチン氏にそれを校閲してもらいました。私たちは50年代から、そうした関係にありました。

そして、私はモスクワに5年留学しました。学校には、2人で行きました。M.ツェデンドルジ氏と一緒に留学したのです。M.ツェデンドルジ氏は1年で帰国しましたが。5年間留学してきた私に人びとは

「学校を卒業してきたのかね？」と聞き、

「卒業していません」と私は答えていました。

「ほう、どうしたのだね？」

「期限が終わったということです」と言っていました。

「そうすると、学士号をもらわなかったのだね？」

「もらいましたよ。それはもらいました。全優でした」

「ではなぜ、卒業してないなどと言うのかい？」

「私はそこで勉強すべきものをきちんと勉強することはできませんでした。だから、卒業していないのです。私は期限が過ぎたから帰ってきたにすぎません」といつも答えていました。

「それで、先生たちはどう言っているんだい？」

「先生たちは、あなたはやっとうヨーロッパの治療を受けたところです。今度は、モンゴルに戻って民間療法を行いなさい、と言いました」と答えるのです。言い換えれば、「自分の作品にある病気を民間療法でなおし、それから少しだけヨーロッパの薬と混ぜる条件が整った、と言っているのだ」と私は人びとに説明していました。

その学校は、私に世界文学に目を向ける条件を与えてくれました。私はその学校に入る前に、フランスのO.バルザックを読んだことはありませんでしたし、アレクサンドル・ドゥマを読んだこともなければ、シェークスピアの「オセロ」以外を読んだこともありませんでしたから。私は日本に芭蕉の俳句があるということも知りませんでした。どうして芭蕉は「秋を経て蝶もなめるや菊の露」と書いたのでしょうか？それは時が終わろうとしている、誰にも終わりがあるのだ、ということを語っているわけですね。これを私は留学して初めて深く悟ったのです。留学先で私はインドの偉大な作家R.タゴールの詩を読みました。ペルシャの有名な詩人オマル・ハイヤームの詩を読みました。

世界文学界の周縁に海があるとすればその岸壁にたどり着いた、ということです。これは私には大きな助けとなりました。そこから戻ってきて、作家協会で働きました。ものを書きました。他の場所には行きませんでした。若い人たちと働きました。今では30冊近い本を出版しています。モンゴルで作家に授与するすべての賞をもらいました。人民作家の称号と国家勲章を取りました。

5 『20世紀の経典』づくり

今は70歳になろうとしています。私の回想録をあなたがたはすべて読んでいます。花田大使に私自身1冊を贈呈しました。花田大使と私はおいしい日本の肴をつまみながら、この本について話し合いました。この機会に言っておくと、モンゴル語や慣習をよく知っている大使がいるのは、本当に素晴らしいことですよ。私は花田氏がモンゴルに大使としてやってきたことにたいへん感謝しています。私の妻のチャンツァルも知り合いです。彼女は生涯、外務省で働いた人間です。儀典官をしていました。それで最近の6年間、つまり1993年から99年までは、北京のモンゴル大使館で働いて、1999年に私たちは家族みなで帰国してきました。

私は帰国後、モンゴル文学アカデミーを創立しました。今その総裁の選挙活動をしています。「モンゴル秘史」という単科大学も設立しました。そこの学長というような仕事をしています。私もまた長であることが「大好きな」人間なのです。高齢であっても、文芸の「苦しみ」を享受して生きています。我が人生はこういうものですよ。

20世紀の30年代以降のモンゴル史は、私の生活を映し出す鏡でもあります。私は20世紀という長編韻文詩を書きました。そこに、20世紀は一方の手でものを生み出し、もう一方の手で破壊した世紀であると書きました。20世紀の1本の足は地獄に、もう1本の足は極楽にあったのです。そんな思いで書きました。

モンゴルに関して、20世紀は3度の革命の世紀であるとしばしば語られています。

1911年の民族大革命

1921年の人民革命

1990年の民主化革命

こうした3つの革命が出現しました。あらゆる革命が生じるとき、同時に光と影の2つが存在するのが常です。この革命は、活動の末に素晴らしいものを生み出しました。しかし、同時に悪しき副産物をもたらしました。そもそも、物事は2つの側面から見る必要があると私は思っています。なぜ仏は人間に2つの目を与えたのでしょうか？物事を、光の面と影の面から見続けるようにするためであろうと思うわけです。モンゴルの仏像には、額にまたもう1つの目がついています。それを「知恵の眼」と言います。文学者たる者は「知恵の眼」を持っている必要があります。普通の人と違うのは、知恵の眼をもっていることにあるのです。

私たちのアカデミーは『20世紀の経典』という5巻本シリーズを刊行しようと準備しているのですが、その最初の2巻はすでに刊行しました。現在、出版社から販売されています。

第1巻には、最近の民主化革命について書いたものが入っています。大統領のN. バガバンディ、最初の大統領のP. オチルバトたちの書いたものが収められています。

この巻を『白い馬の年』と名づけました。

第2巻には『異端者たち』というタイトルをつけました。これは社会主義時代、肅清された作家たちについての巻です。16人の作家たちが内務省に逮捕され、取り調べを受けた際の短い諸記録が収められています。

「おまえはどうして日本のスパイになったのだ？」とっては罪をなすりつけていました。「B.リンチン氏は日本のスパイ、Ts.ダムディンスレンは日本のスパイだ。お前はいつ来たのか？どんな目的で、どんな活動をしていたのか？」という取り調べの諸記録が入っています。モンゴル人民革命党がTs.ダムディンスレン氏を政治局で審議したときの記録や、これまでタブー視されていた議事録、B.リンチン氏がロシアに書き送った手紙やYu.ツェデンバルに書いた手紙などを第2巻に収めました。これは20世紀の光と影の両面を1つの冊子の中に入れた、ということです。

第5巻は『1206年』というタイトルです。それは、モンゴルの礎となる政権が打ち立てられて800周年記念のためにつくった巻です。

このプロジェクトを施行するための資金を民主連合政権の首相であったR.アマルジャルガルが出してくれました。モンゴルの5つの大企業と1つの銀行が支援しました。すなわち、「エルデネット」、「ゴビ」、「ニク」、「モンゴル航空」、「モンゴルロスツヴェトメト」といった「商業発展銀行」です。これらの企業が支援してくれたことに、感謝していることをこの際言っておきたいと思います。これらの本は、こうした人びとの心で生み出されているものなのです。

私はこのことをとても喜んでいますが。モンゴルでは多くの作家が名誉毀損を受けました。37年から40年のころです。それ以降、多くの作家たちが反思想的な作品を書いたという批判を受けました。これはモンゴル文芸史の黒いページになりました。光のあるページはその向こうにあります。

6 チンギス・ハーン賞賛の罪

私自身もまた反思想的作品を書いたと言われ、罰を受けていました。1962年、私がモスクワのゴーリキー文芸単科大学に留学しているころ、モンゴルでチンギス・ハーンの800周年記念がおこなわれたのです。当時、モンゴル人は「チンギス」と口にするこことさえ禁じられていましたが、私は「チンギス」という詩を書きました。私の詩を当時、中央委員会の書記長であったD.トゥムル＝オチルが賛同して出版してくれました。この人は、たいへんに学のある人でしたから。この人は、チンギス・ハーンの記念碑を立てましたし、学会も開きました。この人は、しかし、この祝典が命取りになって仕事を追われました。すべての公職から降ろされました。私は、そのような追われる公職のない人間でしたから、レッテルをひとつ頂戴したにとどまりました。「民

族主義者」というレッテルです。「悪い人間」ということですよ。こんなふうにして、私を「悪い人間」の数に入れてしまったのです。私はこんなふう「悪い人間」の数に入ってしまった、「もうどうしたらいいのだろう？」と恐くなりました。しかし、その「悪い人間」たちの中に、B.リンチン氏やTs.ダムディンスレン氏たちもまた入っているのです。ですから「ああ、それなら私もそんなにひどく「悪い人間」というわけではないぞ」と思うようになりました。そんなわけで、私はくよくよしませんでした。

私には1962年以降、90年の民主化革命まで「民族主義者」というレッテルがついていました。そして、90年の民主化があって、汚名を晴らしたのですよ。そんなわけですから、私はこの民主化を支持する作家たちの1人なのです。民主化のごく初期ではなく、民主化革命が起こって若者たちが動き出したとき、私たちの一部の作家たちは彼らを支持したのです。その仲間たちは4人いました。S.エルデネ、S.ダシュドローブ、D.マームといった作家たちです。そのうち3人はすでに亡くなり、世が永遠でないことを示しました。私の友人たちですよ。1992年に「復興党」という新党が結成された時、私たち4人はモンゴル人民革命党を出て、その党に入りました。その党は、最終的に民主党と合体しましたが。民主化を私たち作家の側から支持したということです。それで、このためにまた「裏切り者」というレッテルを貼られました。しかし、どうすることもできませんね。私たちはモンゴル国を裏切ってはいません。だから「裏切り者」ではありません。私たちはモンゴル国がこの道を進むことを選んだということです。だから、その道を選んだ若い人びとを支持したのです。

私は、今でも彼らを支持しますよ。人は私に、「民主化があなたに何をもたらしてくれたのか？あなたはどのようにして支持し続けるのか？」とよく聞かれます。私は、

「民主化は私の最も望んでいた、たった一つのをくれたのだ」と言います。

「何をくれたのか？あなたに融資でもしたかね、金でもくれたかね、企業でもくれたかね？何をくれたのかね？」と聞くのです。

「自由をくれましたよ」と私は答えます。これ以上に価値あるものは、この世に存在しません。ほかに何をもらうと言うのですか？私は空腹で夜を過ごしてもかまいません。けれど、私には自由がある。食事をして、食事で豊かになって自由がないというなら、家で飼育されている動物と同じことです。柵のなかに入れておいて、出荷するのですよ。豚や鶏や家畜などがあるでしょう？太らせておいて、ある日、

「さあ、もうこいつを食べてしまおう」と言って食べるのです。

作家たる者はそんな状態にいてはならない、と私は思います。文学者たる者は自由でなければなりません。

この20世紀のモンゴルに自由を与えたのは民主化なのです。このプロセスにおいて私たちには難題があります。民主化というものを、私たちは自らに浸透させ、認識す

ることができないでいます。私たちを古いものが後ろ向きに引っ張っているのです。前進しようとするれば、後ろに引っ張られている感じです。モンゴルの主たる困難は、おおよそそんなことになっています。まあ、たしかに別の事情も関係していますが。具体的に言えば、人からものをねだる癖がついてしまったということがあります。

しかし、現在は、まったく異なり、人は誰でも生活するために何らかのことをしようとしています。タバコを売る人もいれば、水を売る人もいます。野菜を植えている人もいれば、小さな飲食店を出して競争している人もいます。牧民の中には柔毛をくしけずって出荷している人がいるかと思えば、家畜を育てて屠って市場で売りさばいている人もいるといった具合です。そうでしょう？中には外国に行くものもいますし、ちょっと貧しい人であれば、周辺の中国との国境からまがい物の商品を買って来るという具合です。ちょっと力のある人なら、日本に行って「ミツビシ」車とか「トヨタ」車を買って来ています。また、コンピューターを輸入する人びともいます。これは、みなこうやって働いているということですよ。人は自分自身の運命のために自分で生きていかななくてはならないということを、人びとはそれなりに理解しています。そうでない人びとは、前進している人たちの邪魔をしているのです。みなで一緒に前進なくてはなりません。すべての人の生活が同じようによくなるように前に進むのですよ。

社会主義時代、教育は重視されていました。もっとも閉鎖的でしたがね。社会主義時代に、私たちの留学した場所は、ロシア、そして少数のヨーロッパの社会主義と言われる国ぐにでした。さらに昔の30年代には、モンゴル人はドイツへ留学していました。当時は、資本主義国ドイツとあって、1つのドイツしかありませんでした。戦前のことですよ。モンゴルの有名な作家D.ナムダク氏は、ドイツで学びました。人民画家のナムハイジャムツ氏もドイツで学んでいました。大作家D.ナツァグドルジもドイツに留学していました。そして、その伝統は途切れました。なぜかといえば、資本主義国だから、行くのが禁じられたのです。そして、「人民主義」という国に行って学ぶようになったのです。これはまあ、一般的な知識を与えるけれども、狭い思想状況へと人を強制するものでした。それが脆弱な面です。とは言っても、数学とか、物理とか、一般に人は教育を受ける必要があります。しかし、ロシアの著名な学者であるG.サハロフのように、自由に意見を言うことができなかつたのです。言い換えれば、人間の精神に限界性が設けられていて、思想に縛られていたということです。

90年代以降、日本やアメリカ、イギリスに留学するようになっていきます。今の若者たちは、ものを見ています。モンゴル以外で、人がどうやって生きているか、人がどうやってものを作り出すかを、見ています。本を読み、言葉を学び、人間がそもそもどうやって生活しているかを知って帰国しています。自分自身の生活を別の生活と比較させるようになっていきます。20世紀から21世紀にかけて驚異的に技術が進歩していま

す。この進歩からモンゴル人は遅れてはなりません。ある程度知っておかなくてはなりません。こうした知識をもつ中堅幹部を養成する必要があります。だから、私は若い人たちに

「進め！勉強しろ！」と言うわけです。そうして昔の教育システムと最近のシステムを統合させる必要があります。

これらは切り離してはなりません。以前に獲得したその知識や教育を私たちも利用しなくてはなりません。あなたは社会主義時代の人間だから無用だと言ってはならないのです。ロシアにそうしたことが起こっていました。帝国ロシア時代に利用していた鉄道を革命ロシアの汽車は走ってはならないと言うのです。以前の鉄道を破壊して、再度、革命の道を敷設して、革命鉄道を走らせる必要があると言っていたのです。私たちはそんなことをしてはいけません。つまり、私たち年配の人間にだって学んだこともあるし、生活の経験もある。若い人たちはそれを吸収する必要があるのです。この2つは統合する必要があります。この2つを統合させて、裂け目をふさいで、モンゴル国の発展を先に進めねばなりません。さあ、かと思いますが。

K：いえいえ、たいへん興味深いお話です。

P：私は作家です。つまらないことをたくさんしゃべるかもしれません。作家を語らせるままに語らせておいてはだめですよ。モンゴル人は「老犬は何も来ないのに吠えなく吠える」と言います。モンゴル人の犬は家の外にいますか？家の番をしているのです。老犬は主人を寝かせてはくれません。本来なら、狼や泥棒が来て吠えるものではないか？けれど、何も起こりもしないのに、泥棒が来ているように感じるということです。

K：あなたのお話は、私にはとても興味深いものです。

P：そもそも、21世紀はグローバリズム、グローバル化の世紀になると言われています。モンゴルでこのグローバリズムが必要か、そうでないか、今私たちは議論しています。私たちはこのグローバリズムにどのように参加するのか？これはとても重要な問題です。私たちはかつて「プロレタリア・インターナショナリズム」についてとても話題にしていました。今ではもはや語りません。プロレタリアート（労働者）は今でもいますし、インターナショナリズムもあるにはあります。当時は「労働者の国際主義に邁進する真の社会主義国モンゴルを建設する」と言っていました。今は「グローバル主義に邁進するモンゴル国を建設する」というわけです。いったい何なのでしょう。人類というのは、そのつど互いに敵となるのでしょうか？互いに敵である必要はありません。互いに歩み寄らなくてはいけません。互いのところに入って茶を飲みます。私はあなたたちのところに訪問して魚を食べ、あなたたちは私たちのところに来て羊肉を食べ、私はあなたたちのところへ行ってサケを飲み、あなたたちは私たちのところへ来て、シミーン・アルヒ（牛乳からできた蒸留酒）を飲む。人類はこう

でなくてはなりません。私はそんな関係を支持します。

何を尊重するかと言えば、国家や民族は自分自身の文化を維持しなくてはなりません。みな同じになってしまえば、無用なものになってしまうでしょう？みんな同じような服を着ると、どうなりますか？今、あなたたちのキモノがなくなってしまうえば、どうなりますか？みなが同じようなものを持ってしまうたら、どうなりますか？モンゴルの民族服がなくなってしまうえば、どうなりますか？だから、そうした民族的な特色あるものは、そのままにしておくのがいいのです。ここではモンゴル力士に取り組みをさせておけばいいのです。向こうでは、相撲を取り組ませておけばいいのです。その、ウズベキスタンだったか、どこでしたか、格闘技の種類があるわけですが、そこでは、またそこでの取り組みをさせておけばいいのです。

こういう具合にして人類は豊かであるわけです。様々な特色や色というものがなければ、世界は貧弱になってしまいます。これは花もない干からびた土地と同じことです。ですから、国家や民族はすべて歩み寄り、付き合っ、互いに助け合わせておけ、と思います。日本には天皇がありますが、私たちのところにはいません。大統領はいますが、それは、あるがままにしておけばいいのです。私たちのところにもハーンは昔いましたよ。私はこういう考え方をしていますし、普遍的といえるような考え方をする人間です。

7 1950年代のウランバートル

K：あなたがウランバートルに初めて来たとき、ウランバートルはどんな感じでしたか？

P：ウランバートルには51年前に初めてやってきました。しかし、私はナーダム（建国記念日におこなわれるスポーツ祭典）を見に来たのです。車で来ました。私たちの故郷には、大モンゴル・シャラブジャムツというというすごく有名な力士がいたのです。彼は、私たちの村の人間でしてね。その老人をナーダムに招待するためにウランバートルから迎えの車が来ていました。私たちもナーダムに行くために、車を待っていました。当時、牛乳からバターを加工する場所が村ごとにありました。バターを作って、ウランバートルに出荷します。大きな木の器に入れて出荷していました。それを運ぶ車がしばしば来ていました。その上に座るのです。ナーダムを観戦するために、この車に5~6人が便乗しました。

当時、私の村で学校長をしていた人と一緒に、同郷の人の家に降りました。それは青年同盟長のD.ヤダムスレン氏の家でした。そして、私はウランバートルでは彼の車に乗って、ナーダムを見に行きました。当時、ナーダムをこの場所（スタジアム）ではおこなっていませんでしたよ。あの飛行場のこちら側にある大きな広場でおこなっ

ていたのです。青年同盟長というのはですね、長としてはかなりえらいのですよ。その長についていって、偉いさんたちの座るテントに入って見学しました。そこにいるうちに、D.ヤダムスレン青年同盟長は

「喉が渴いているか？何か飲むか？」と尋ねるのです。

私はたしか17歳でした。

「飲みたいです」と言いました。それで、丈の高いグラスに入ったものを持ってきて、私の前に置いてくれました。それをちょっと飲んでみると、まずいといたらね、どうしようもありません。私はまったく飲めませんでしたよ。それで

「苦い！」と言いました。

「じゃあ、それなら、これを飲め」と言って、またコップに入ったものをくれました。それを飲んでみると、とてもおいしい甘いものでね。中には果物が浮かんでいました。こうして、私は果物ジュースを初めて飲んだというわけです。最初に私にくれたのは、ビールでした。当時、ビールのことをモンゴル人は「ウマの尿」と呼んでいました。

そして、ナーダムを見終わって帰りました。ウランバートルからウマで帰りました。私たちの故郷はですね、ここから300キロメートルもあるのです。モンゴル人はこの程度の距離を「近距離」と言うのですよ。ウマで疾駆して、一晚、野宿して着いてしまいました。鞍をはずして、鞍褥を敷いて、鞍を枕にして、野宿したのです。夏の夜は凍えることはありません。そのようにして、ウランバートルを初めて知るようになったわけです。

当時、ウランバートルには、そんなにたくさんものはありませんでした。政庁舎は少しだけありました。最終的に大きなものになりましたが。今の政庁があるところには劇場がありました。外務省は現在の所在地にそのままありました。このスフバートル広場の、現在、証券取引場のある建物は、エルデブ・オチル記念映画劇場がありました。主な建物と言えば、これでした。そのほかといえば、天幕と柵があっただけです。その後、私はウランバートルに1952年に入ってきたということですね。そしてその後、ここに住みつきました。

8 ウランバートルの変貌

ウランバートルの良いことも悪いことも、あらゆることは私の眼前で起こりました。新しい多くの建物が、たくさん建設されました。素晴らしい建物もいくつか建てられましたが、醜悪な建物もたくさん建てられました。ウランバートルは、まだゴミを綺麗に処理できないでいます。この問題はすべて私たちと関係しています。中には、宇宙からか、月から来たかのような人びともいます。実際、このウランバートルはとても汚いのです。ゴミだらけです。

「タバコの吸殻を捨てているし、ゴミや、ジュースの空き缶を捨てている」とよく人は言い合っています。そうして、つねに話題にしているにも関わらず、その当人がポイ捨てするような人間がいます。驚くべきことですが、彼らに私は、

「自分でゴミを捨てるのなら、他人がゴミを捨てるなんて言うな。黙っている！自分で捨てないなら、他の人にも同じようにさせろ。君のその無駄口は無意味だ」と言います。

「君が見ていて、誰かが通りでゴミを捨てようとしていたら、『そのゴミを、ゴミ箱に持って行って入れろ！2人で持って行って入れよう！』と言うようにしろ！」と私は言うわけです。

「こんなふうに言ってこそ、君はモンゴル国民だ。そうでなければ、君は何者でもない。君は客でもなければ、主人でもなく、何者でもない！」と常々言っているのですよ。

現在、ウランバートルには、モンゴル国の3分の1の人口が暮らしています。人口が増えています。移住してくる人が多いのです。これは、ありえないことではないし、そもそもありうることです。都心に向かって引っ越すという現象は、世界中のどの国にも見られます。しかし、地方の生活状況が少しでも変われば、人びとの生活や居住地をうまく配分できると私は思います。

つまり、地方の生活を向上させて、そこで文化的な暮らしをして、ものを見聞できる条件を整える必要があります。これもまた輸送と関係する問題です。そうでしょうか？このすべてのことを何とかして、地方にも書籍が配達されるようになる必要があります。現在、地方では書籍が配達されなくなってしまいました。書籍が配達され、新聞が配達されるようにするなど、すべてことを調整しなくてはいけません。そうすれば、人びとは、自然と移住をやめます。モンゴルのいなかというのはね、本当に素晴らしいところなのです。モンゴル人として、何千年ものあいだ住んできた土地ですよ。私たちはすっかりなじんでいます。もちろん、厳しい気候であることはたしかですが。しかし、だからといってどうです？ツンドラや北氷洋においても人間は生活していますよ。日本の探検家が北氷洋（原文まま）を犬ぞりで移動しているそうですね。いろいろな人がヒマラヤ山頂をめざしていると言うではありませんか。人間というものはまたそうやって暮らす、不思議なものですよ。だから、少々暑くとも、少々涼しくとも、大丈夫なのですよ。

9 世界の多様性

しっかり凍えるというのは悪くないですよ。冬の厳寒時に外へ出ると、白い風が吹いています。風が真っ白でね。これは驚異的な現象です。そういうものはほかのどん

な場所にもありません。モンゴルだけに存在するのです。この貝殻のように白い風が吹きすさぶとき、モンゴル人はどんな気持ちになるでしょうか？本物のモンゴル人には新鮮な馬乳酒を飲んでいるような気持ちが生れます。自然とのあいだで調和して結びついているのです。具体的に言えば、あなたがた日本人が海のない場所で生活するとたいへんでしょう？そうですか？私たちには平原がなければたいへんですよ。私は水が怖いのですよ。大きな器にお茶を入れると、私は怖いと感じます。なぜなら、私たちは乾燥した大地の人間だからです。平原の、そして山の人間なのです。だから、この自然に調和して生活しなくてはいけません。ここに適したインフラを作り出す必要があるのです。ここに合った道をつくって、通信施設を置いて、人が住むモンゴル天幕を少し快適にしなければなりません。天幕をどんなふうに、どうやって快適にするのか？どうやって暖房をするのか？どうやって明かりをつけるようにするのか？電気をどこから利用するのか？といったことを私たちは考えねばなりません。私は、こういうことをしてくれたらなああと望んでいます。そのように望むのであって、モンゴルをどこかの国と同じようにするのはいけません。モンゴルはモンゴルのままで存在させておくべきです。そもそも、すべての人は、ものを少し対比させて考える人はみな、自分よりも他者を尊重しなければなりません。

「私のモンゴルは世界で無比であり、すべてのものが素晴らしい。他のものは、全く必要がない」と口にする人びともいます。こういう言葉は、知恵ある人の言葉ではありません。モンゴルが素晴らしいのは当人たちにとってであり、日本が素晴らしいのも当人たちにとってであり、ロシアのシベリアが素晴らしいのも当人たちにとってであり、果てはロサンゼルスやインド海、すべては当人たちにとって素晴らしいのです。あらゆるものには、それだけにしかない素晴らしさがあります。そこから、人間は自分自身の幸福を引き出しています。そして、自分自身の幸福を見つけ出している場所、それこそ人が生活しなくてはならないところなのです。自分の母国がそれです。だから、互いに素晴らしいものを理解しあうべきです。素晴らしい点がどこにあるか、それを私たちはよく理解しなくてはなりません。素晴らしいものを理解できた人は、人に悪いことができなくなるものです。

若い人たちには恋心や恋愛があります。デートに急いでいる青年は花を踏んだりはしません。美しい花を見れば、そこを避けて通り過ぎます。なぜなら、彼を美しいものが支配しているからです。だから、「美が世界を救う」と言うのは、こうしたことがあるからです。芸術作品、美しい絵画、素晴らしい音楽、これらすべては人の心を清らかにしてくれます。柔らかかにしてくれます。人が柔らかかに優しくなっているということは、悪いことをしないということです。人の心が柔らかかになって優しくなったとき、ナイフをもって人に襲いかかるなんてことはありません。「美が世界を救う」という言葉の意義はここにこそあるのです。

今述べたことが真実であって、単に美が存在していれば、他には何も必要がないというわけではありません。人は心が優しくなくてはなりません。人間は母の乳を吸って大きくなると言います。母の乳だけを吸って大きくなるわけではなく、母の乳とともに母の心を吸って大きくなっているのです。そうして初めて人は自己を形成します。父母は本人の身体を造るが、その人の精神は産まない、という表現もありますけれども、実際には、母の乳と一緒に母の心が入ってくるのです。母親は、慈しみ、子守唄をうたい、

「わが子よ、いい人間になってね、元気に育ってね、人に悪いことをしてはだめよ」といった言葉をいつも心の中で思って過ごしています。だから、また繰り返して例の美しいものについて言うのですが、美しいものが世の中を救っているというわけなのです。母親を愛する心を持っている人なら、本当の意味で愛する人であれば、人に悪いことができないものなのです。

「私がそんな悪いことをしてしまえば、母はどうするだろう？」と必ず思います。そう思う能力のなくなってしまった人が、自分自身、人ではなくなってしまうのです。獣に変身するのです。言い換えれば、母の乳から抜け出して血の中で生きる、そんな状態にいたってしまっているということです。そのために戦争や強盗が起こっています。私はこういうふう思うわけです。だから、人間を美しくする文芸、芸術、このすべての美しいものがこの世にはなくてはならない。文芸や芸術は人がいらいらして慌てふためいて向こう見ずな判断を出すことから逃れさせてくれるのです。文芸や芸術の力がこれです。私の思想はこういうものです。

10 社会主義時代の苦悩

L：「黄金の世代」とおっしゃいましたね。もともと才能があったとしても、それを世に出すのはたいへんだったのではありませんか？なぜ「黄金の世代」と言うのですか？

P：1世紀に1度出会う作家を言うのですよ。「黄金の世代」というのは、そもそもそういうものです。私の理解では、どの世代も自分たちを代表する人間を輩出します。モンゴルのサイクルでいえば、12年で1世代となります。12年が過ぎると「世代からはずれた」と言います。12年ごとに、自分たちの代表者を部門ごとに輩出するということです。政治、絵画、音楽、演劇、文芸、スポーツそれぞれに、自分たちを代表する人を出すのです。この代表者たちは、その部門で仕事をしていた他の人びとよりも、鮮やかに抜きん出ているのです。これを一身に集めた人びとは皆「花曼陀羅」と言ってもいいでしょう。これを「黄金の世代」と言うのです。20世紀に、こうした「黄金の世代」がありました。この「黄金の世代」というのは、すべての部門で輩出しまし

た。科学、芸術、スポーツといったすべての部門にね。

社会主義時代の誤りを私は自分なりの言葉で説明しますと、私たちをちっぽけな写真立てのなかに入れていたということです。私たちはその写真立ての中にずっと入っていたのです。私たちはもともとそれを壊して外に出てこなくてはならなかったのですが。真の芸術家たる人間なら、真の作家なら、枠を壊さなければならなかったのです。しかし、私たちはそれを壊すことができませんでした。これは私たちの誤りです。

この写真立てを、B.リンチン氏やTs.ダムディンスレン氏たちは打ち壊して出て行きました。彼らは、罰を受けても、非難されても、色々な中傷をうけても、法律を出されても、罰金を課されても、行動したのです。そうして自分たちのしようとしたことを実行して進んで行きました。私は彼らを本当に尊敬しています。彼らは実際、刑務所にも入りましたし、本当にきつい刑務所に入って尋問を受け、殴られてもいました。そして、出所しました。なんとか殺されなかったという程度です。生涯、彼らをけなしたり、彼らに賞を与えたり、そうかと思うとまた、けなすといった感じです。そうでしょう？それでも、打ち負かすことはできなかったのです。彼らは真に精神力のある強い人びとだったのですね。そうした精神力を、生きた偉いさんがたは1人で太刀打ちできなかったというわけです。どんな王でも、指導者でも、その精神力を打ち壊すことはできませんでした。その力はそのまま残るものなのですね。

古代ヨーロッパでは、多くの学者や物書きたちが火刑に処せられました。抹殺していました。そうでしょう？いくらそうしても、彼らを根絶やしにすることはできなかったのです。火刑によって抹殺していた当事者は忘却されたのに対して、火刑に処された人びとは忘却されませんでした。そのように、私たちのB.リンチン氏やTs.ダムディンスレン氏2人は忘却されずに記憶に残った人びとです。彼らの中傷して誹謗していた人びとは、今では忘れ去られました。誰も彼らについて思い出すことがありません。彼らは単に蝶のような寿命の人びとだったのです。人びとの植えた花から少しばかりの蜜を吸って食べて、秋になって花がしおれるとともに寿命も尽きたのです。モンゴルの多くの作家たちは、色々なやり方で批判され、叱責され、否定されました。発禁ものの著作、永久発禁といった著作はたくさんあります。私たちのところには、「検閲機関」という名前の「出版物内務省」がありました。

「これは刊行してもいい、しかしそれはいけなさい！さあ、そのD.プレブドルジという人の書いたものがそちらに行きますよ。それは吟味しなさい。そいつは間違ったことを考えますからね。それをよく調べて、誤りを除き、調整してください！」という命令を与える機関があったのです。

社会主義はそれ自身、何を土台にしていたかと言えば、イデオロギーの上に成立していたのです。社会主義を成立させていたのは、それですよ。イデオロギーがなければ、社会主義は成立しません。その先に、生活の基盤、安定する基盤はないのです。

民主主義というのは、人が自分の生み出した生活の上に成立します。

「仕事をしろ、労働して人と同じように暮らせ、良い食事をしろ、良い服を着ろ、良い劇場に行って映画や演劇を見ろ、綺麗な娘と知り合え、良いレストランに入って食事しろ、すべてのものはお前次第だ！」と言うものです。

他方の社会主義時代には、

「そのまま暮らしている、茶碗を置きっぱなしにして座っている、社会主義がお前を養ってくれる！」と言っていたのです。1つは、イデオロギーの上に、もう1つは生活の上に成立するのです。なぜ民主化運動が勝利したかと言えば、社会主義が宗教よりも力が弱いからです。なぜかと言えば、社会主義は、

「来世というのは存在しない。お前は現世でなしとげればできて、できなければ不運はそうやって終わるってことさ！」と言っていました。宗教は、

「お前には来世がある。お前は現世で良い生き方をすれば、来世でうまく人間に転生する。罪を犯して間違っただけをすれば、お前は地獄行きになる」と教えていたのです。これは、恐るべきオルグですよ。宗教のこの哲学は、人間の本質を把握した、言葉を代えれば、頸動脈をがっちり押さえた教えです。宗教は、ここが強いのです。他方、マルクス主義では「共産主義時代には、需要に応じて使い、能力に応じて労働する！」と教えるのです。君が共産主義に入るのであれば、単に仕事をただけで、パンや穀物を無料で受け取って暮らすということです。これは「おとぎばなし」です。人びとは、これを信じてはいませんでしたから。もともと、実に素晴らしいおとぎばなしです。そうですよね。生活の中でそんなものはなかったし、これからそうなるということもないと思います。人類は何千年もの昔、世界、つまりこの土の上に生じてから後、そんなことはなかった、と知っているわけですから、信じることもなかったのです。

宗教はもう一方の脈をしっかり押さえていたので、無神論者でも、まさに困難な時代に直面すれば、たとえば、雷が鳴ったときや、突然、飛行機が揺れたとき、「神さま仏さま！」と思わず言うものです。そのときに、首相たちの名前を呼ぶなんてことはありえないし、誰か上司の名前を呼ぶなんてこともありません。

「ああ、神さま仏さま、どうなっているのでしょうか？」となら言います。自然に、自分自身に浸透しているのですよね。若いころ、モンゴルのある作家が党細胞長だったのですが、くしゃみをしたときのことで。モンゴル人は傍で他人がくしゃみをする時、「仏さま、お許しを！」と言う習慣があります。その人がくしゃみをして、私が「市の党委員会よ、お許しを！」と言いましたらね、その人は、初めはわけがわからなかったようで、しばらくして大笑いしましてね。

「あなたは、どうしてそんなことするのです？」と聞くのです。

「いや、今、私は他にどう言えば良いかわからなかったからですよ。なぜなら、党の

長たる人間は仏教を信仰してはいけなんでしょう？ですから、私はあなたが市の党委員会長の気に入ってもらえるように、そう言ったのですよ」と答えました。こういうことが起こっていたのです。これをみればわかるように、イデオロギーというのはそれ自身、人工的なものだったということです。それは作り物でしたし、喩えて言うならば、人や自分に塗りつけたペンキということですよ。

そろそろインタビューを終わりにしてはどうですかね？私は、日本人のことを仕事の組織の仕方が実に的確で、時間をすごく大切にする、たいへんよく計算されたことをする人びとだと思っています。だから、こういう素晴らしい機械で、そんな遠いところから持ってきて、かなり unnecessary な会話を収録する必要がありますかね？

11 最新作『赤い家の囚われ人』

L：あなたは、ご自分の本に『赤い家の囚われ人』と題されています。これについて、簡単にご説明くださいますか？

P：モンゴル人たちは「白い家」に住んでいます。モンゴルには「赤い家」はありません。なぜ「赤い家」と言ったかと言えば、ロシア革命の影響で、モンゴルが共産主義国家になったからです。それで、モンゴルの家が赤くなりました。この「家」というのは、私たちをとりまく環境のことですよ。私の理解するところでは、社会主義時代に、モンゴルは1つの大きな赤い家になりました。その中にいる人びとは、ちょうど囚人のようにして生活していました。自由もなしにね。これがその意図です。ご理解いただけるかと思いますが。

成長時代は、赤い壁の向こう（ロシア）で

老いる時代は、白い壁の向こう（中国）で過ごした、と私は書きました。

2つの大きな壁の向こうで、私の生活の11年間に過ぎました。そして、この2つの国は私に幸運を与えてくれました。私はロシア人と一緒になっておいしく酒を飲み交わし、塩漬けの魚を食べていました。中国人と会うときにも、有名な素晴らしい料理を食べ、中国酒をちびちびやりました。人はどこへ行っても、人と親しくする必要があります。人を理解する必要があります。私は上層の生まれであり、君は下層の生まれだ、といった差別観があってははいけません。人というのは互いに理解して付き合えば、とても良い関係になります。中国でこれほど大勢の人を飲み食いさせるというのは、たいへんな難題ですよ。彼らは勤勉だから、この課題を克服することができます。そうでしょう？中国人はたゆまぬ労働をしたからこそ、この大国を成り立たせてきたのです。

ロシア人も実に素晴らしいです。ロシア人の面では、ひとつ、こんな表現がありますよ。ロシア人を殴って叩きのめして、「ごめんなさい」という言葉を起き上がる前に

言う必要があると言うのです。ロシア人たちは、人の信頼に応えうる人びとですよ。100グラムの酒を彼らは「馬の服用量」と言います。「馬の服用量」を飲んでしまって、話をして座っているとき、ロシア人は本当に素晴らしいのです。一般に、あらゆる人びとにそれぞれの特徴があります。日本人が、そんな大量の酒を飲めば、どうなってしまうでしょうね？ガラスのコップでアルコール度の高い酒を飲んでしまった日本人は一卷の終わりでしょう。

あらゆる人びとと、その独自の文化的特質を考えながら付き合う必要があります。人びとは互いを理解しあう必要がありますよ。国家や民族のあいだの喧嘩や衝突や論争というのは、互いに理解しあわないから起こっている問題です。理解しあわないということは、世界の分割が誠実に行われなかったことと関係しています。

「この土地はお前のもので、ここからこちらは私のもので、もしお前が入ってくれば撃つ！」と言って分けました。そのように分割するとき、分割が誠実にには行われなかったんです。具体的に言えば、1つの民族を3つの国に分けるという例です。あなたも、モンゴルを例にとってみてください。モンゴルの一部はロシアにあります。一部は南の中国にあります。一部はここにね。こういう具合に3つに分けられました。朝鮮は2つに分けられました。そして、モンゴルは3つに分けられた国で、これは不誠実なことが起こったためだということを知っています。そうでしょう？最もよく知っているのですよ。それなのに知らないふりをしています。それどころか、中には国際関係の正義や秩序についての教えを語っているのですからね。北方領土はもともと日本の島ですよ。日本の島である、ということを誰も否定することはできません。ほんの小さなところですよ。これを理解していないわけではなくって、ちゃんと理解はしています。しかし、それを日本に返還しないとやっきになっているのです。このような不誠実なことが、人びとのあいだに殴り合いを引き起こし、また論争を引き起こしています。論争が始まると、必ず殴り合いになるものです。

そうすると、最も重要なことは、人々が相互に理解しあい、相互に承認し合えるような訓練をすることです。必ず他人を自分と同じようにする必要はないですよ。別の人びとが自分とは全く異なった考え方をしてもかまわないのです。もしこの本が青色だとすると、

「違う。それは、青じゃなくて、黒だ」と言ってもかまわない。そのとき、その人はその青や水色を「黒」と認識しているということだし、その人がそう見ているということですよ。その人はそのように「黒」と見て、認識しているのを尊重しなくてはなりません。なぜなら、その人にとっては、それがそうだからです。その人にはそのように見る権利があります。その権利を尊重しなければならないのです。だから、相互にあらゆる権利に制限をつけずに、人びとが相互理解すれば、先に言った、色をありのままに決定することができるのです。こうしたことに文芸が役立つようにと私は

常に思っています。

12 日本人との関係

私の目の前で大きく移り変わっています。ハルハ川会戦が始まるころ、私は6歳だったことを思えばね。日本はモンゴルの領土と人民を占領しようと、大軍を動かして侵略戦争を始めたという歴史があります。どのような国際関係上の理由があったにせよ、これは侵略戦争でした。これを日本では別の説明をしているようです。どのように説明するかは日本の問題です。この戦争は、モンゴルが勝ちました。モンゴル軍は日本軍をつぎつぎと倒し、大量の戦死者が出るほど攻撃し、母国から撃退したのです。今は小さくなってしまったモンゴルが、大きくなった日本を打ち負かしたと、喜んだものでした。かつて世界の半分を支配したモンゴル軍が、海で嵐にあって水没し、小さな島国日本が勝ったでしょう。このように、歴史はめぐるものだと個人的に思ったものでした。ハルハ川で戦いが始まるちょうどそのころ、日本の有名な作家である司馬遼太郎氏が関東軍の若い兵卒として国境の向こうにいたそうですね。このことを彼は著作の中で書き記しています。彼もまた母国のことを思っていたにちがいません。何世紀ものあいだ、ほとんど何の関係もなかった日本とモンゴルが敵対する歴史がそこから始まったのです。このような状況は長年のあいだ続きました。そして、両国の関係がよくなる発端が「ゴビ・コンビナート建設」で拓かれたというわけです。新しい時代には、さっき言った敵同士が友達となったということです。かつての敵だった日本人が、モンゴルに来るようになりました。単に来るのではなく、私たちに助けるといいます。いまや私たちはまったく異なる関係になりました。これは、まったくもって、たった一世紀のあいだに起こっていることで、人間のこの一生の範囲内で起こっていることなのです。そもそも、モンゴル人が日本人を助けたという証拠は歴史にありません。また私たちモンゴル人もまた日本人の助けなしにここまで来ました。それなのに、今はどうして一方が援助国になり、一方が被援助国になっているのでしょうか？これは誰のために必要な助けなのでしょうかと私は思います。

この援助はモンゴルに必要なものなのでしょうかと私はときおりいぶかしく思います。私は援助なしに生活したいものだと思います。しかし、援助しようという日本人の善意を私たちは受け取らなければなりません。私のように考えるモンゴル人は多いのです。人の助けではなく、人を助けて生きているのが遊牧民の性質です。どうして日本政府はモンゴルに援助すべきだとみなすのでしょうか？私はこの問題に対して今まで解答を得ていません。モンゴルでの刊行物には1人の日本人もこの問題に答えていません。なぜ、この問題に誰も答えないのか、これもまた興味深い点です。

日本とモンゴルの関係は良い方向に変化しているのでしょうか？日本人はどう見ている

のでしょうか？私はこの点についてわかりません。関係がさらに悪化するということだあってありえるでしょう？モンゴル人が日本人と会ってはならない時代があったくらいですよ。10年前、日本から人が来て、あなたがたのように私の写真をとろうとすると、私は必ずモンゴル内務省から許可を取る必要がありました。その許可なしに、私が来ることはありません。許可なしに来れば、私は捕まえられて、尋問される目に遭うのです。

「お前はなぜモンゴルの敵たちと会っているのか？お前に日本のスパイ組織に入れと言うのか？お前に日本に來いと言っているのか？どこから勧誘が来ているのか？お前に何をくれたのか？ドルをくれたのか？お前はどれくらい受け取ったのか？お前は日本の銀行に口座を開いたのか？お前はモンゴルの政府や行政機関のどんな悪口を言ったのか？」と、かつてなら尋問されていたでしょう。モンゴル内務省は、誰か人を、何らかの件で逮捕して尋問するときは必ず「お前は日本のスパイか？」と聞くものでした。なぜなら、戦前、私たちのところに日本のスパイやゲリラたちがたくさんいたからです。彼らは大いに破壊工作をしていたのです。「日本のスパイとゲリラは危険極まりない」という考えは、長いあいだモンゴル人の心から払拭されることがありませんでした日本人がスパイや戦争をしなれば、そんなことにはならなかったでしょう。現在では、モンゴル人の考えはゆっくり変わってきました。

今、日本人と会ったからといって誰も私を非難しません。誰も尋問しません。ですから、両国の関係は良くなっていると考えてもいいはずですよ。私たちは国家間の関係も、民間関係も良好でありますように！と望んでいます。21世紀は戦争の無い世紀であれかしと望んでいます。いちいちやりあってどうするのです？いちいち殺しあってどうしますか？少々のあいだは、平和で気持ちよくありたいものですよ。人というのは、そんなふうを考える能力をもった生き物ですよ。もともと、人は自分自身、知恵ある生き物として、そのように考えることができなければなりません。

13 慈悲の心

しかしながら、政治というのは、実に難しいものです。情勢が移り変わり行くからです。何ごともなかった人びとを互いに争わせたり、殴り合いをさせたり、仲を悪くさせたりするのです。人がたくさんいれば友好的であらねばならないと考えるべきです。各人が、このために尽力することはできないとしても、ある程度自分のできる範囲で努力しなければなりません。軍隊があるからといっても、それは政府の玩具であってはならないのです。

K：今、玩具になっていますか？

P：なっていますよ。軍隊では指令を与えられれば、銃で撃ちますよね。誰を銃撃して

も躊躇なしです。これは恐るべきことです。しかし、時代が変わって、銃撃せよ、と言っても銃撃しない時代がやってきましたよ。インドネシアの大統領が戒厳命令を敷く、といった命令が出て、軍隊は支持しなかったです。そんなわけだから、流血は起こらなかった。あのロシアでも、騒ぎが起こったときに、兵士たちは銃撃することを拒みました。戦車がロシアの政庁「クレムリン」の前にやってきて、ポンポンという音を鳴らしていました。しかし、彼らは武装していない市民には発砲しませんでした。このように、軍隊は自分たち人民に発砲してはなりません。こうした人びとが、その軍隊に大勢いる必要があります。軍人といえば、引き金を引くとき、どこでもかまわず銃を乱射するものです。どんなチェックもない。そんな玩具のような動物ではないようにしなければいけません。このことで、もう一度何を言おうとしているか？という、知恵が豊かであるなら、良質でなければならぬ、ということなのです。人には慈悲心と柔軟性がなければならぬ、ということをやわやわしているのです。

またもや、私は例の哲学を伝道しようとしているようですね。もしかしたら、こういうのは少々理想で、実現されるべくもない種いのことかもしれません。しかし、人はそもそも光に満ちた素晴らしいものを追いかけているときには、どんなときも意気消沈しないものです。人によっては、百万長者になろうと思ってもかまいません。いいじゃないですか？そのように思わせておけばいいのです。人によっては世界的に有名な学者になって新基軸を開こうと思ってもかまいません。また人によっては、人を永遠に記念するために金の像を立てることを考えてもいいのです。各人ごとに美しきものを追わせておけると思っています。人間のこの美しいものに対する憧れを断ち切ってははいけません。

それをばかにしてはなりません。月に行きたければ月に行き、火星に行きたければそうして、そこで生活する手立てを得て、そこから妻を娶って、変な鼻をした人を連れて来るがいいのです。それから、どこで結婚式をするにしても、好きにするがいいのです。そう夢見ても、悪いことは何もない。美しいものを夢に見るべし！人間というのは、夢の力で生きていくものなのです。人間というのは、そもそもが、そういう生き物です。そういう生き物であって「明日、私は何のご飯を食べようか？」とはいつも考えないものです。今晚の食事は、家に実際に帰ってきてはじめて決めればいいことです。なぜなら、うちの冷蔵庫のなかに何があって、どんな野菜があって、どんな肉があるか、何を混ぜるかということは、家に帰ってきて初めて見るものだからです。まさにそのようにするのであって、毎日、夕食のことを考えたりはしないものです。人が何について考えるか？と言えば、人は明日の幸福について考えるのです。つまり、明日については常に夢があるということです。そして、人間の夢というものが人を人らしくしているのです。そのような夢をもたない人は、他人を害し、また自

分自身をも害します。殺人を犯すのは、そういう夢がなくなっている証拠です。明日を夢見ることができなくなっているのです。だから、みなで一緒に美しい夢を見ようではないですか？そうでしょう？

K：そうですね。

14 エルデネ氏の思い出

K：最後に、S.エルデネ氏について、思い出をお話くださいますか？私は彼にインタビューをするつもりでしたが、間に合いませんでした。

P：S.エルデネは、モンゴルの散文の、ヨーロッパでは小説というジャンルの作家です。たいへん有名な作家です。この人は、ヘンティ県出身のブリヤート人です。S.エルデネの生活なら、私はおおよそわかりますよ。彼の母親とも私は知り合いですから。ヤンジマーさんという年輩の方です。その子供たちをすべて知っています。しかし、父親は見たことがありません。彼のお父さんはハル・センゲという人で、1937年に捕まえられて銃殺刑になりました。やはり反体制ということですね。それに日本のスパイという汚名も着せられました。あるいは、白のスパイだ、とか、よく知りません。

S.エルデネは父親なしで育った人です。私たちは50年代にこの文芸界に同時に入った仲間です。私は、劇場の文芸担当をして、S.エルデネは大学の学生でした。医学部で勉強する学生でした。S.エルデネはその学校を卒業して、その当時、「狂気の病院」と呼ばれていた精神病院に医者として就職しました。その後、厚生省で働いて、その後、作家協会に移りました。私たちは一生涯を共にしました。私たちは、50年くらいの付き合いです。その付き合いで、かなり多くの場所に一緒に行きました。モンゴル各地も一緒に回りましたし。チンギス・ハーンの幕営のあるフドゥー・アラル、アワルガ・トソンといった場所に私たちは4度、夏の休暇を過ごしました。私たちは黒海でも夏の休暇を過ごしました。何度も旅行を共にしました。私たちには秘密というものはありませんでした。妻にも隠していることを語り合っていましたよ。私も、この本で、S.エルデネのことについて書きました。S.エルデネも私のことについて本で書いています。S.エルデネの身体が悪かったときも、よく見舞いに行きました。それで、いつも話をしていました。

「お前と俺は友人だ。仲間たちがみんな逝ってしまって、この世も終わってしまうなあ。いまさら2人別れてどこへ行くというのだい？」と話していました。S.エルデネはモンゴル文学に画期的貢献をなした人です。S.エルデネの画期的貢献の特徴は、叙情という点に認められます。とても美しく、優しく、心情的な、そういう作品を書きます。その散文作品を、驚くべきやり方で、美しいモンゴル語で書くのです。彼はブリヤート人ですよ。ハルハヤブリヤートは同じようにモンゴル語で話すので、どのよ

うな違いありません。しかし、私が思うところ、注目すべき特徴があります。私は若い人たちに、

「あなたたちはハルハ出身でありながら、母語を知らない」といつも言うのです。「そのブリーヤート人がハルハ方言を彫るように磨いた作品を見なさい」とね。真実、S.エルデネの作品を読むと、とても美しい側対歩の馬に乗って、素晴らしい平原のなかを、風を口笛のように響かせて、こんなふう横に、1枚のスカーフをたなびかせている娘と併走して疾駆しているかのようなイメージが浮かぶのです。不思議ですよ。S.エルデネのその作品を読むと、上がったたり下がったりすることがひとつもない。彼の作品は、人をその人の流れのままに、優しく漂わせてくれるように進むのです。これは、S.エルデネの驚くべきところですよ。このような驚くべきものを書けるといっては、作家たる者の偉大な能力で、偉大な才能ですよ。このことを、私は今しよっちゅう言っているわけです。あなたがたはS.エルデネと知り合いだったとおっしゃるから、興味深いかもしれないので、エピソードをひとつ語りましょう。

亡くなる2日前に、私は見舞いに行きました。息子のE.バトゥールが待合室にいて、本人はその向こうの部屋にいました。私はベッドに腰掛けました。最後に会ったのがそれです。

「やあ、どうだい？身体の調子は？」と聞きました。

「悪いよ。昨日、ほとんど死にかけた」と言うのです。彼は医者ですからね。何が起こっているかを知っていました。そして、

「僕はちょっと起き上がって座りたい。2人で並んで少し座ろう」と言うのです。それで、私は身体を起こしてやりました。そっと持ち上げて座らせました。私が介添えしてね。2人でこうやって横に並んで座りました。体力というものが完全になくなっていましたね。それで、私に言うのです。

「人間はたいへん不思議なものを夢にみるものだ」と言うのです。私は驚きましてね。

「昨日の晩、俺は不思議な夢をみたよ」と言うのです。

「どんな夢だい？」と聞きました。

「ほら、妻のツェレンデジドがまだ若くてね。それで俺たち2人はブラジルの大統領官邸ですごく大きな饗宴に参加しててね。そこには、大規模なお祝いや饗宴やダンスが繰り広げられているのだ。ツェレンデジドときたら、若々しくてね、そんな夢を見たのだ」と言うのです。それで、私は言いました。

「いや、そもそも、僕たちはブラジルなど行ったことがないじゃないか。いったい全体ブラジルの夢を見るなんて、どういうことだろうねえ？せめて、あのピノチェットを夢見ないかねえ。なぜチリの夢をみてはならなかったのだろうか？」と、2人でおもしろおかしいことを話していたのです。これはS.エルデネの最後にみた夢だったかもしれませんね。彼がなぜそんなものを見たかと言えば、この世のどこかの場所で

好きな人と一緒に青春時代を再現しているからです。人生を最後に理想の姿で見たということです。それで私はすごく感動しましてね。戸口にバトールがいました。出て来て、彼に父親がそんな夢をみたそうだと言いました。それから私は帰宅しました。彼の家に電話しましてね。奥さんに

「見舞いに行ったがね。ちょっと疲れているようだね」と言いました。そして夢のことについて言いました。すると彼女は笑って

「いやだわ。あなたたち2人って、夢のことまで話していたのね?」と言っていました。私たち2人が最後に会ったのがこれでした。私たちは、生命は別々だけれども、心は1つだったと言えます。今、私は孤独に過しています。私には胸襟を開けて語り合うS.エルデネのような人間がもういません。つれあい、父、母、子供といったすべての人が逝ってしまうとき、人は孤独になりますが、友達がなくなるときも、人は同じように孤独になるものなのでしょう。これも人間のひとつの孤独ということですね。だから、人は友達を大切にする必要があります。

元気うちに、大切にしておく必要があるのだと思いながら私は生きています。S.エルデネは巨人です。S.エルデネはモンゴル人がいかに啓蒙精神をもっているかを文芸の世界で代表することができた人です。モンゴル人が、文字や書物を読んだり、文化に思いを馳せたりするときに、S.エルデネを忘れることはありません。私は時折、S.エルデネを妬んでいました。そうです。私はS.エルデネについて、こういう言葉を言いたいですね。モンゴル人は忘れない、忘れようとしてもS.エルデネを忘れることはない、と。こういうことを言いたいですね。

K: どうもありがとうございました。